

---

# 月夜の夢

淡雪ぼたん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月夜の夢

### 【Nコード】

N4090T

### 【作者名】

淡雪ぼたん

### 【あらすじ】

高校時代、いじめで自殺したクラスメートの遺書に、いじめの首謀者として何故か自分の名前が・・・。

無実の汚名を着せられて、心傷つき人を信じられなくなったヒロイン 篠原 愛純と 純粋なパステル画家 月夜野 晶（つきよの あきら）との 純愛ラブストーリーです。《携帯小説サイト「フォレスト」から、こちらに引っ越して来ました。》

## 第1話 一粒の涙 (前書き)

この小説には文中に、いじめ自殺、家族心中、血の要素が含まれる文章など、残虐な描写が一部ございます。(残忍性の程度は低レベルです。)

(このような表現が苦手な方は閲覧を控えるか、ご注意ください。)

下さいます様をお願い申し上げます。

## 第1話 一粒の涙

- - - 序章 - - -

埼玉県立 聖山東高校

いつもと同じように、自転車に乗って、学校に行った。ただ、その日はいつもと違っていた・・・。

朝学校に行くと、救急車とパトカーが・・・。

人だかりの隙間から、覗き込んで衝撃を受けた・・・。

昇降口の前のコンクリートにうつぶせで倒れる少女・・・。

ピクリとも動かずに、頭から血が・・・。

「ねえ、2年B組の 鈴木 ひろみ だって・・・」

「うそーっ」

「いじめを苦に飛び降りたらしいよ・・・」

耳を疑った・・・。

「ひろみ？」

その日の午後、校長室に呼ばれた。

警察官二人もいた。

「篠原さん、自殺した鈴木さんのバッグから、遺書が見つかったね、いじめの首謀者だと君の名前が書かれてるんだが・・・。話を聞かせて貰えるかな？」

「そんな・・・」

寝耳に水だった・・・。

ひろみとは親友とまではいかなかったけど、仲の良いクラスメートだった……。いじめた事なんて一度もない……。何故私の名前が書かれてるの？

それから いくら否定しても信じてもらえず、いじめの首謀者にされて、学校にいらなくなり、退学した。

マスコミに追いかけて、この土地にもいられなくなった……。父親も会社を辞めて、それからあの忌まわしい出来事が……。

\* \* \* \* \*

- - - それから5年後

《c a f e 銀の Spoon》

「愛純ちゃん、吉沢法律事務所さんの所まで、コーヒーの配達お願いできるかしら？」

30代後半ぐらいの面倒見の良さそうな女性店長が、テイクアウト用のコーヒーを慌ただしく準備する。

「はい、行ってきます」

「場所は分かる？」

「はい大丈夫！イチヨウ並木の側のビル3階ですよね？」

「そうそう……。お願いね」

「行ってきます」

コーヒーを配達した帰り道、愛純は心を奪われた……。

「うわぁ……。綺麗……。」

銀色に近いぐらいに一面鮮やかな黄色のイチヨウ並木……。

この世の中に、こんな美しい場所が存在するんだ……。

世の中の人全てが、こんな美しい風景のような、心をもっていればいいのに……。

ふと目をスライドさせたら、その側に3階建てのギャラリーがあった……。

「ギャラリー　月夜の夢……。」

近付いて、ショーウィンドに飾られた絵を見る。

何とも言えない優しい色調で、洋館とイングリッシュガーデンが描かれている。

「油絵じゃないみたい……。何で描いてるんだろう……。」「

しばらくジッと見てたら、突然ギャラリー入り口の扉が開いて背の高い男の人が出てきた……。

天然がかった緩やかなウェーブがかった柔らかそうなくり色の髪……。

純粹そうな澄んだ瞳に長いまつ毛……。

鼻の上にくっすらとソバカスがあって、イタズラ少年の面影のある、綺麗な人だ……。

年齢は20代後半ぐらい？

「もし良かったら、中の絵もご覧になりませんか？」

「あの．．．。ただ見てただけで、絵を買う予定ではありませんが．．．」  
何となく絵を売りつけられないかと不安になって、構えてしまった．．．。

「ハハハ．．．。そんな事、全然気にしないでよ。美術館に絵を見に来たつもりで気楽に見てくれたら．．．。入館料無料だし」

「はい。あの．．．じゃあ、おじゃまします」

ギャラリーなんて初めてで、ドキドキしながら中に入った。

「何か聞きたい事があったら、絵の説明しますよ」

「あの．．．。ショーウィンドーにあった絵ですが．．．。何で描いてるのですか？」

「ああ、あれはパステル画ですよ」

「パステル？」

「チョークの様な物って思い浮かべてくれたら分かると思うけど．．．。乾燥した顔料を粉末状にして固めた画材なんだ。粉っぽいから、最後にフキサチーフって言う定着材で定着させるんだ」

「凄く綺麗で、うっとりしました」

「それは嬉しいな．．．。あれは僕が描いた絵なんです」

「え、そうなんですか？ とても素晴らしい絵ですね」

「気に入って貰えて嬉しいな．．．」  
他の画家さんの絵も色々あるから、どうぞ見てって下さいね。それからこれ、うちの名刺ですどうぞ。私はこのオーナー件画家の月夜野 晶と申します」

「あ．．．ありがとうございます。あ、じゃあ私も．．．。近所のcafeで働いています」  
そう言つて、cafeの名刺を渡した。

「『cafe銀のスプーン』．．．。時々行つてますよ。ちょっと君の事は思い出せないんだけど．．．」

「私、キッチンにいる事が多いので．．．」

「もし良かったら、名前を聞いてもいいですか？」

「愛純です、篠原 愛純。近所なら配達もしますので、良かったらご利用下さい」

「じゃあ今度は是非．．．。さあ、どうぞゆっくり絵を見てってください。僕は受付にいますから、何か聞きたい事がありましたら、遠慮なく声をかけて下さいね」

「はい」

愛純は一つ一つ絵を見て回った。

愛純は一つの絵の所で、足がくぎ付けになつた．．．。  
森に囲まれた湖の柔らかなパステル画．．．。  
この絵を見た途端に気持ちが高ぶつて、目から涙がこぼれた。



「この絵、気に入りましたか？」  
そう言って晶が愛純を見て、ハツとした。

「あ．．．すみません。目に何か入った見たい．．．」

「大丈夫ですか？」

「大丈夫です。いけない私、配達途中でした．．．。帰らないと．．．」

「そうですね．．．。またお時間のある時にでも、気軽にお立ち寄り下さいね」

「はい。ありがとうございます」

そう言って、愛純は風のように立ち去って行った．．．。

「あの子、何で泣いてたんだろう．．．」  
愛純の見ていた絵は、自分の描いた瑠璃沼の絵だった．．．。  
感動していると言うよりは、悲しんでいる様にも見えた．．．。

「あずみちゃんか．．．」

。色白で薄ピンクの頬に、薄茶色の瞳の大きな目に、長いまつ毛．．．  
薄ピンクのちよつとふつくらして、優しそうなくちびる。

つやつやしたサラサラのストレートの薄茶色の髪．．．。  
純粹そうな、柔らかな優しい顔立ちの凄く綺麗な子だったな．．．。  
年齢は21歳ぐらい？

また会ってみたいな．．．。

\* \* \* \* \*

それからパツタリと彼女は来なかった．．．。  
もう一度会ってみたい気持ちは日に日に増していく。  
水曜日はギャラリーの休業日．．．。

思い切つてお店に行つてみた。

cafe 銀のスプーンの前に来て、ガツクリした。

「なんだ、カフェもうちと同じ休業日か．．．」  
ついてないな．．．。

帰ろうと思つた時だつた．．．。

お店の扉がガチャリと開いて、彼女が出てきた。

「あ．．．」

「こ．．．こんにちは」

「この間はどうもありがとうございました」

「カフェに来ただけで、お店がお休みで、ガツクリして帰る所でした」

「せつかく来てくださつたのに、ごめんなさい」

「いいえ。よく確かめないうで行つた僕がいけなかつたんですよ」

「あの．．．。お店は休業日ですが、もし良かったらお茶していきませんか？ 今、試作品のケーキを作つていた所なんです。実験台と言つては失礼ですが、よろしかったら味見していきませんか？」

なんてラッキーなんだろう・・・。

「いいんですか？」

「甘い物はお好きですか？」

「はい、もう大好きです・・・」

「どうぞ、入って下さい」

「はい、おじゃまします」

「セイロンオレンジペコに合うような焼き菓子を何点か作ってたのですが・・・」

「カフェのお菓子をあなたが作ってるのですか？」

「はい」

「すごいな・・・」

「そんなことないですよ」

「この紅茶、レモン、ミルク、ストレート、どれにも合う、わりと飲みやすい親しまれ易い紅茶なんですよ。どうぞ・・・」

そう言って、紅茶を出してくれた。

「この紅茶に合いそうなマドレーヌを何点か作ったのですが・・・」

そう言って、お皿に沢山のマドレーヌを出してくれた・・・。

「うわあ。すごいなあ」

「左からブレーン、ココア、紅茶、バナナ、抹茶、くるみ、ラムレーズン、オレンジ、レモンなんですが．．．。すこしづつ味見してください」

どれも美味しい．．．。

「この紅茶に一番合いそうなのは、どれだと思えますか？」

「どれも美味しくて、甲乙つけがたいんだけど．．．。僕の好みはオレンジかな？」

そう言った途端、彼女が喜んだ。

「やっぱりそう思いますか？私もそう思いました．．．。同じ意見で嬉しいなあ．．．。」

彼女が笑うと真夏のひまわりのようだと思った。

「意見が合って良かった．．．。ちよつとドキドキでした」

「ごめんなさい．．．。そんな緊張しないで、気軽な感じで味わっていただけたらって思ったのに．．．。」

「いえいえ．．．。でも、こんなに沢山味見できて嬉しいなあ．．．。」

「まだ沢山在庫がありますから、良かったら持って帰りませんか？」

「ええつ。いいんですか？嬉しいなあ．．．。」

「私こそ喜んでいただけで嬉しいです」

彼女から沢山のマドレーヌと紅茶の茶葉も貰った……。

「是非お礼をさせてください」

「と……とんでもない。試食モニターをお願いしたお礼ですから」

「いえいえ……。本当に何かさせてください」

「そんな気を使わないで下さい。また良かったらモニターお願いしたいし……」

「えーっ。嬉しいな」

「そうそう……。絵とか描きますか？」

「昔、漫画家になりたくて、ケント紙を買ってきてつまらない漫画とか描いた事がありますが……」

「僕、水曜日に仲間と一緒にデッサンする会をやっているのですが、もし良かったら、参加しませんか？」

「私、絵がとても下手ですよ」

「上手い下手は関係ないですから……。是非お願いします。来て欲しいな……」

「水曜日は定休日なので暇ですが……」

「じゃあ是非・・・」

「わかりました。何を持っていけばいいんでしょうか？」

「僕が用意しますから、手ぶらで身ひとつで来てくれれば・・・」

「え？」

「いや・・・表現が変だったかな？」

照れまくりながら、晶が頭を掻く。

それを見て、愛純がふつと笑った。

「分かりました。じゃあ、お菓子持って行きますね。又試食してください」

「嬉しいな。じゃあ来週いいですか？」

「はい」

「ギャラリー前に朝10時にいいですか？」

「はい。行かせて頂きますね」

あれから僕は早く水曜日がやって来ないかと、そればかり考えていた。

そしていよいよ水曜日・・・。

籐の大きめのバスケットを手を持って、肩からは大きめのトートバッグを下げて、彼女はやってきた。

トートバッグにはお茶の入ったポットが二つ入っている様だった。

「随分大きな荷物ですね」

「お菓子と飲み物を持って来たのですが……。何人来られるか分からなくて、足りるかどうか……」

「そんなに気を使わないでいいのに……」  
「心配りの効く優しい子なんだって感じた。」

「持ちますよ」

そう言つて、トートバッグと籐バスケットを持ったら凄く重かった……。

「重いですよ！大丈夫ですか？」

「凄く重いですね、ここまで来るの大変だったでしょう……」

「私力持ちですから……。こんな朝飯前です」

「絵の道具、揃えましたから使つて下さい。この間のお礼です」

「え……。こんなに色々悪いですよ……」

「遠慮しないで！ あ……。あずみちゃんって呼んでもいいですか？」

「あ、はい」

「僕は晶で……」

「わかりました」

こんな可愛い子と知り合えて、僕は舞い上がっていた・・・。  
世の中がばら色に見えてくる・・・。

この世の中に、一目惚れっていう事ってあるんだと思った。  
今思えば、彼女を一目見たその時に、自分の上に落雷が落ちてクラクラになってしまった。

その時は、彼女の心の奥底に深い闇と、悲しみを抱えてるなんて事を全く知らなかった。

あのギャラリーで見た、彼女の流した涙の訳も・・・。

(第2話に続く)



## 第2話 神様っているんですか？

晶と愛純は、スケッチ仲間が集合するまで、ギャラリーの前で話しながら待っていた。

「正確に言うと、『クロッキーの会』って言うんですけど、スケッチって言った方が分かり易いかなと思って・・・」

晶が、にこやかに会の説明をする。

「スケッチとクロッキーと、どう違うんですか？」

興味津々の好奇心の顔で、目を輝かせる愛純。

「実はそんなに大差はないんだ。スケッチは大まかに人物や風景などを描写する事で、絵の基本的な作業なんですよ。本当に簡単にスケッチする事を”ラフスケッチ”とも言いますし・・・。クロッキーは素早く簡単に描写する事で、人物を写し取る事が多いです。

でも、自由な会だから、スケッチでもクロッキーでも、自由になんでもいいからどんどん描いて見てくださいね。

子供の落書き帳みたいな感じで・・・。

それからこれがクロッキー帳・・・。

紙質は色々あるけれど、このクリームコットン紙の方が鉛筆のノリが良くて強弱やコントラストも生きるし、気に入ってます。

鉛筆は2Hから6Bぐらいまであるといいですよ。良く使うのはHB、B、2B、辺り・・・。

カッターナイフで1センチぐらい芯を出す様に削って、芯の硬い鉛筆以外は、先は尖らせなくて大丈夫ですよ。後で見本で削ってあげ

ますね」

晶から色々教えて貰って、楽しそうな愛純。

「いろいろありがとうございます。新しい事を始めるのって、なんだかワクワクしてきます。

絵を描くの好きですし．．．。誘っていただいて、参加出来て良かったです」

「いえいえ．．．。僕の方こそ参加してくれて嬉しいです」とても嬉しそうな様子の晶。

話している間に、クロツキーの会の仲間も集まった。

20代前後の学生さんが多いが、中年の人や、かなり年配の人も居る。

「この会のメンバーは、大体、僕の母校の芸大の後輩が多いのですが、一般の方も沢山いますし、上手い下手意識しないで、楽しんでくださいね」

「はい」

「じゃあ今日は、近所の大きな公園に行きます」

広い公園には大きな池があつて、ボートに乗る人、子供を遊ばせる人、恋人達．．．。

色々な人が思い思いの時間を過ごしていた。

「晶さん、お手本を見せてもらえますか？」

「いいよ。じゃあ、あずみちゃんを描くね。そこのベンチに座って

みて．．．」

「はい」

晶はあずみを見ながらサラサラと鉛筆を走らせる。

「はいっ、描けた!」

「えっ。もう?」

「クロッキーは、素早く簡単に描写だから．．．。大まかでもいいんだ。公園に来ている知らない人がモデルだから、じつとしてないし．．．」

晶の描いた絵を見て、驚く愛純。

「あんなに素早く描いたのに、凄く上手ですね」

「一応これを職業にしてるからね．．．。じゃあ、描いてみて．．．」

愛純は緊張しながらクロッキー帳を広げて、ゆっくり描き始めた．．．。

向こうのベンチに腰かけている、中年男性だ。

描き始めた途端、すくと立ち上がって去って行った．．．。

「あっ。待って．．．。途中なのに行っちゃった．．．」

「こっちは許可なく勝手に描いてるのに、途中で動かれるとアツと思うよね。そう言う時は、次の人を狙う．．．。素早く描かないと、逃げられちゃうよ．．．」

「よっし!」

必死に描き始める・・・。

「焦って描いたから、なんだか変な顔・・・。宇宙人みたい・・・」

「気にしない、気にしない・・・。次!!!」

そうやって、何枚も描いたら、あっという間にクロッキー帳が半分まできた。

「こうやって描きながら、人間観察もなかなか面白いなって思っ  
てあれこれ想像しながら描いてるんだ」

「え?」

「例えばあの人・・・」

そうやって、ベンチに座ってキョロキョロしてる女性を指さした。

「多分恋人が売店にジュースとか買いに行ったとかで席を外してて  
戻って来るのを待ってる気がするな・・・」

「私は、女性の友達が手を洗いにいったとか、ちよつと席を外して  
て。戻って来るのを待ってる気がします・・・」

「よし、じゃあどっちが合ってるかかけてみようか? 勝った方は、  
ジュースをおごる」

「いいですよー。ようし!!!」

暫くして、女性1人と男性2人がやって来て、楽しそうに話し込んでから4人で立ち去っていった。

「うーん。これは・・・。ダブルデートって感じ?」

晶が腕組みして、悩み顔。

「物凄く微妙な展開ですよね」

愛純も頬に手を当てて、首を傾げる。

「引き分けだね」

「ですね」

そう言って、お互いに目を見合わせて笑った。

休憩タイムで、皆で愛純の持って来た、お菓子とお茶で、ゆっくりしてから、遊びタイム……。

「遊びタイム？」

愛純が目丸くする。

「クロツキーの会には、学生さんが多いので、いつの間にか遊びタイムっていうのが出来たんです」

笑顔で説明する晶。いつも本当に爽やかな人だ……。

「で？ 何をするんですか？」

「今日は何するんだっけ？」

晶が弟子の学生に聞く。

「今日は、ダブルスでバドミントン大会です」

準備も良く、すっかりトーナメント表が出来ていた。

見たらしっかりと、愛純の名前も加わっている。

「僕とダブルスですね。頑張りますよー!!」  
晶がやる気満々になって、腕まくり。

「私下手ですよ．．．」

「気にしないで、気にしないで．．．」

そして晶と愛純VS学生ペア組の対戦．．。

「あずみちゃん、来たー!!」

晶の声に慌ててラケットを振るが空振り．．。

「キヤーツ!!」

なかなか当らなくて、メチャクチャラケットを振りまくる愛純。

「アハハハ．．．」

その姿が可笑しくて、皆で大爆笑．．。

「もうーっ。笑わないくださいよ。私苦手なんですよ」  
ほっぺを膨らませ、いじける愛純。

「アツサリ負けちゃって、すみません」  
晶に平謝りする。

「気にしないで！ 楽しめればいいんだから．．．。豪快にラケットを振るあずみちゃん、格好良かったよ」

「カッコいいと言うよりも、皆さんの笑いのツボをとりまくっていい感じがしますよ．．．」  
真っ赤になって、照れる愛純。

日も暮れ始めて、解散の時間になった。

「晶さん、今日はとても楽しかったです。ありがとうございました」

「また是非、参加してね」

「はい」

「あ．．．。連絡先聞いても大丈夫？」

「あ、はい」

「じゃあお互いに交換しましょう」

お互いに赤外線通信でアドレス交換．．．。

「そつだ、今度もし良かったら一緒にパーティーに行かない？」

「ええっ？ パーティーですか？」

「そう．．．。ドレスとかは借りれるし、会費は僕の連れと言う事で無料になるし、心配しなくて大丈夫だから．．．。セレブの多く集まるパーティーなんだけど、美味しい物沢山食べれるし、プリンセスになった気分になれるし、きつと楽しいよ」

「無理ですよー。私のような庶民が参加したら、浮いちゃいますよ」

「大丈夫だよ。僕の連れと言う事で、一緒に行かない？」

実は、一人で行くと、うるさい子達に追い掛け回されていつも困ってね……。いつも絵を購入入下さる財界の大物の方主催のパーティーで断れないし……。ちょっと困ってて……。」

「晶さん、素敵だから人気高そうですね。私みたいなのが一緒について行ったら、釣り合いませんよ。」

「そんな事ないって、一緒に行こうよ。」

我ながら強引な気がしたけれど、彼女を連れて行って、友人に自慢したい下心もあった……。」

「僕を助けると思って……。」

「うーん。そう言われても……。」

「ねっ」

「分かりました……。でも、私の様な者で、本当にいいのでしょうか？……すごく心配です。」

「全然大丈夫だよ……。来週の水曜日の夕方からなんだ。」

「水曜日は特に用事はないのですが……。」

「じゃあ決まりー!!」

結局、パーティーに参加する事になった。本当に大丈夫なのか、心配だった……。



愛純は、少し早めに晶と待ち合わせをして、晶の知り合いのフォーマルブティックで、ドレスと靴とバッグを選んでもらって、そこでヘア&メイクをした。

「いやあ……。凄く綺麗だよ」

凄く驚く晶。頬が紅潮して目が輝いて凄く喜んでくれてるんだと感じた。

愛純自身も、鏡に映る姿を見て、自分じゃない気がした。人は美しい服を着て、綺麗にしてもらうとこんなに変わる物なんだと思った。

「なんか。恥ずかしいです。自分じゃないみたい……」

「今日のパーティーの主演は、あずみちゃんに決まりだね」

パーティー会場に着く。

晶は、愛純が独りぼっちにならないように、とても気を配った。

本当に優しい人だ……。

こんなに心優しく、気が利いて、純粋な人はなかなかいないだろうなって思った。

「おお晶、久し振り……」

「やあ」

「元気だった？」

アーティストっぽい人が3人やって来た。

「おお。皆元気か？」

「この可愛い子はだれ？」

「おい！紹介してよ」

「最初に言っておくけど。僕の連れだからね……。クロッキーの会のメンバーの篠原 愛純ちゃん。年齢はええと……」

「21歳です」

「こいつ達は、同じ芸大の同期で、油絵画家の 広岡 幸治と、空間デザイナーの山崎 晴信、そして、イラストレーターの白鳥 賢」

「こんばんは、はじめまして」

「宜しくね」

「宜しく……」

「こんばんは」

晶さんの友人、油絵画家の広岡さんは大学を一浪したそうで、晶さんよりひとつ上の29歳だそう。

背は175センチぐらい？ 他の皆が180センチ以上あるので小さく見える。

眼鏡の似合う、とっても優しそうな大らかそうな方だ。

実際話して見たら、イメージ通りの人だった。

晶さんは見た目むさ苦しい奴とか言ってたけれど、馴染みやすそうな感じの方だ。

長年空手をやってるそうで、肩幅はガッチリしている。

趣味は山登りだそうで、癒しのオーラがある人だ。

空間デザイナーの山崎さんは、一見俳優さん？と思えるぐらい洗練されてて、顔立ちも整ってて、洋服のセンスも抜群で、足も長い……。

大学時代モデルのアルバイトもしたらしい……。

女性にモテそうだけれど、女たらしと言う訳でもなく、話してみる  
ととてもまじめな人だ．．．。  
空間デザイナーだけあって、一步先を行ってるような、都会的な人  
だ。

イラストレーターの白鳥さんは、白馬の王子様と言う言葉がピツタ  
リな方だ。

それに思いやりにあふれ、包容力もある。

子供の絵本の挿し絵などもしているそうで、子供好きな所もある。

マイルドな優しい綺麗な顔立ちに、ナチュラルだけど洗練されてる  
洋服をさりげなく着こなす感じ．．．。

芸大の講師もしているそうだ。

こんな素敵な4人の男性達．．．。

女性がほうっっておくはずがない、回りにはいつも女性が集まってく  
る。

だけど、そんな女性の誘惑にも見向きもしない．．．。

そんな中に、妖精の様に素敵な美しく若い女の子が一人．．．。

今日のパーティーの一番の注目となった．．．。

そんな時だった．．．。

「もしかして．．．あずみちゃん？」

ある男性から声をかけられた。

「えっ？」

と思って振り向くと、同世代ぐらいの若い男性が立っていた。

育ちの良さを感じさせる、品の良い高級そうなスーツをさりげなく  
着こなして、純粹そうな綺麗な顔立ちの人だ。

少し大人になっただけけれど、その顔には見覚えがあった。

「古橋先輩……」

「やっぱり、あずみちゃんだね。物凄く綺麗になって、驚いたよ。あの頃もとても可愛かったけれど、それからもっと素敵になったね」

古橋先輩は、高校時代に憧れてたひとつ上の先輩……。

あの事故が起きる少し前ぐらいに、先輩から告白されて、何度かデートに行った事もある。

。高校生のデートだから、一緒に映画見たり、遊園地に行ったり……。

手を繋ぐのがやっとで、お互いにドキドキし合った、爽やかなそして、ほろ苦い思い出……。

お互いにそれ以上は何も言えなかった……。  
どうしてもあの事が頭に浮かんでくる……。

「あずみちゃん、知り合いの人？」

晶が気がついて、声をかけてきた。

「あ、はい。高校時代の先輩です」

「こんにちは！古橋です。」

晶の事を伺うような、ちょっと敵視した様な目で見て、挨拶をした。

「こんにちは、画家の 月夜野です」

その時だった、

「雅人！！」

甲高い女性の声がした。

その女性は、古橋を見つけて真つすぐこっちにやって来た。

ハデメのドレスに濃いめの化粧。

華やかな綺麗な顔立ちだけれど、見るからに気の強そうな感じ……。

私は振り返って凍りついた。

クラスメイトだった、朝倉あさくら 佐和子さわこだ……。

「あなた……あずみ？」

「こんばんは」

「やだ、何でいるの？」

「おい、失礼だぞ！」

古橋が、嗜める。

「だって、この子あの事で学校やめたんじゃない。こんなドレス来てこんな所にいる立場じゃないわよ！！」

彼女の甲高い大きな声は、周囲の人の耳にも届いて、皆がこっちを注目する。

「雅人に近付いて、凶々しいわね」

「いい加減にしろよ！ 俺が声をかけたんだよ」

このやりとりに、周囲の人が集まってきた。

「この子はいじめでクラスメイトを自殺においやった、人殺しなのよ……！」

驚いた顔をする者、冷やかな目で見る者、回りが愛純に注目し始

めた。

もうこの場所にいられない……。

「晶さん、こんな事になってごめんなさい。先に帰りますね」  
そう言つて、愛純は駆け出した。

「あずみちゃん」

晶は慌てて追いかけたが、見失つてしまった。

「お前はなんて奴なんだ」

古橋が怒りの表情で佐和子を睨みつける。

「真実でしょ」

ふふん。と言つ顔でツンとする。

その時だつた……。

「すみません。私こう言う者なんですけど……。今日はこのパーティーの取材で来てたんですが、今の話し詳しく聞かせて貰えますか？」

そう言つて、佐和子に名刺を渡した。

「週刊 特選ジャーナルの 編集記者？」

佐和子がニヤリとする。

それを嫌悪感の目で見つめる古橋。

\* \* \* \* \*

あれから電話は繋がらないし、cafeに行つてもあずみちゃんは  
いなかった。

レジ横のショーケースに焼き菓子が並んでるので、キッチン奥です  
っと仕事をしているのかもしれない。

あずみちゃんはこれお店の女性店長の姪らしい……。  
彼女に何があっただらう……。

水曜日になつて、クロツキーの会に来てくれるかなと仄かな期待を  
寄せていたが、彼女は現れなかった……。

ガツクリ肩を落として、教会前の通を歩いていたら、はるか前方に、  
彼女の姿を発見した。

「あずみちゃん」

彼女はぼんやり教会の掲示板を見てから、教会に入つて行つた。

僕は吸い込まれるように、彼女の後を追つて教会に入つて行つた。

この教会は大正時代に建てられた、ゴシック調のトレーサリーを  
伴つた大きな尖塔アーチ窓に、尖塔アーチ形の入り口、優美な大き  
なステンドグラスが目をひきとても美しい教会だ。

水曜夕方から、パイプオルガン演奏と聖歌隊コーラスと説教があり、  
誰でも気軽に参加出来る。

教会に入つて行くと、出口近くの長イスに愛純が座っていた。

美しいパイプオルガンの音色が響き渡っている。

晶はそつとその隣に座つた。

「晶さん……」

とても驚いた顔の愛純。

晶は何も言わずに、愛純を安心させるように優しく微笑んだ。二人で無言で、パイプオルガンの優美で美しい音色に聴き入る。そして美しい聖歌隊の歌声……。教会の聖堂内に美しい声が響き渡った……。

「神様なんて……」

愛純が小声でつぶやいた。

「え？」

晶が愛純を見る。

「神様なんて、本当にいるんですか？」

愛純は目を伏せて俯いて、吐き捨てるように小声で言った。

晶はそっと、愛純の手に自分の手を重ねた。

驚いて、晶を見る。

「神様がいるのかどうかは良く分からないけど、僕は、あずみちゃんのこと、信じてるから」

愛純がすっと手を引っ込める。

「今の私には、誰も信じられません」

(第3話に続く)



### 第3話 忍び寄る闇

晶がまっすぐと愛純を見て、口を開いた。

「僕の事、信じてくれなくても良いから．．．。何も期待したりもしない。」

ただ、僕はあずみちゃんを信じてるし、力になりたいんだ。放っておけないんだ。

一方的な思いだと思うけれど、僕は信じ続けるし、あずみちゃんが幸せになれるように、力になりたいと思うし、幸せを願ってる」

怪訝そうな顔をして、晶を見つめる愛純。

「何でなんですか？ 私の事良く知らないのに、何でそんなに．．．」

「出会ってから、まだ日は浅いけど、あの彼女が言ってたような事をする人じゃないって事は分るよ。」

上手く説明出来ないけれど、僕は、初めてあずみちゃんと会った時から、魅かれて、放っておけなくなってしまうたんだ。一目惚れって言うのかな．．．」

「そんな事言われても．．．。今の私には、晶さんの気持ちに答えられませんし、人を信じたり、愛したりなんて出来ません」

「分かってる。一方的でもいいんだ。そんな状況じゃないって事も分かってる．．．。」

ただ、力になりたいんだ。

幸せになる為に、時には人に頼ってもいいんじゃないかな？」

「私と関わると、晶さんが不幸になりますよ」

「そんな事は全然気にしないし、構わないよ。僕に頼って欲しい」

「私は、佐和子の言っていたような、心の腹黒い人かもしれないんですよ」

「そんな人じゃ絶対に無いって分かってる・・・」

やがて教会の聖堂の中は、聖歌隊の歌が終りシーンと静寂が広がった。

「良かったら、ゆっくり話しが出来る所に行かない？」

何も言わずに、愛純がコックリ頷いた。

近くの公園に移動して、ベンチに腰かけた。

小高い丘の上のベンチは、煌めく街の夜景が目前に広がって幻想的に見えた。

「これ、良かったら・・・」

公園に行く途中の自動販売機で買った、ホットミルクティーをあずみに渡した。

「ありがとうございます」

「寒いかな？」

「大丈夫です」

「何があったのか？ 聞いても大丈夫？」

愛純はしばらく目を伏せていたが、やがて決心した様に口を開いた。  
「あの時の事は私も何がなんだか良く分からないんです。  
高校2年生の時でした。」

朝いつもの様に学校に行ったら、昇降口のエントランス前にクラス  
メイトが倒れてて、飛び降り自殺だったそうで……。その彼女の  
残した遺書に、何故か私の名前が書かれてて……。

私、いじめなんてした事は一度も無いし、彼女とは物凄く親しい友  
人関係でも無く、ただのクラスメイトだったから……。

校長先生も、教頭先生も、学校の先生方全てが私を疑って……。  
仲の良かった友達もみんな離れて行って……。

マスコミに追い掛け回され、亡くなった彼女の両親に責められ……。

本当に地獄のようでした……。

父は職を失い……。なかなか次の仕事も見つからず……。ノイ  
ローゼの様になって……。

それでも家族皆励まし合って、頑張ってきました。

ある日、家族全員で父の運転する車で近所の湖に出かけて……。  
助手席には小5の弟が座って、私と母は後部座席に座って……。

突然父が、『ゴメン 許してくれ』って言って、急にアクセルを踏  
み込んで、湖に落ちて……。

母が必死に私のシートベルトを外して、『あなたの事信じてるから、  
負けないで、生きるのよ』って、水が車内いっぱいになってドアが  
少し軽くなった一瞬にドアを開けて……。物凄い力で、車外に押

し出してくれて．．．。  
夢中で？いて、結局私だけ一人生き残りました．．．。

そして母の妹である、伯母が私を引き取ってくれて、今日まで励まして力になってくれて．．．。

自分の命と引き換えに、私を救ってくれた母の為に．．．。  
優しい伯母の為に．．．。  
弟と父の分も頑張って生きようって．．．。  
必死で頑張ってきました。

高等学校卒業認定の資格を取って、製菓学校に通って、製菓衛生師の資格を取って．．．。紅茶コーディネーターとバリスタの資格を取って．．．。

必死で頑張れば、いつかは報われるって、幸せになれるって願って頑張ってきました．．．。

でも、もう疲れてしまっただけ．．．。

「ご家族の事、辛かったね。あの湖の絵を見た時、泣いていたのはその事を思い出していたんだね」  
目をうるませる晶。

「ついあの時の事を思い出してしまったんです。弟を助けてあげる事も出来なくて．．．。自分一人助かってしまって．．．。申し訳無くて、とても悲しく辛いです」

「あずみちゃんが笑顔になれるように、僕はずっと力になるから．．．。疲れた時には僕が肩を貸すから．．．。」

「人を信じるのが恐いんです。心を許して、裏切られたらって恐怖で……。もうこれ以上は頑張れなくなりそうで……」

「お願いだよ。一度だけで良いから僕に心を開いて欲しい、決して裏切らないよ」

「きつとご迷惑をお掛けしてしまいます」

「迷惑かけても構わないよ。辛い目にあってきたあずみちゃんに比べれば、そんな事、大した事じゃないから。」

これからは一人じゃないよ。勿論優しいおばさんと、もう一人僕も味方だから」

晶はあずみの手を包み込んで、まっすぐな目で見つめた。

「そんなに思っ頂けて、嬉しいです。」

私、もう一度、頑張ります。 負けないように頑張ります」

「僕に沢山よりかかっていいんだからね」

「晶さん、ありがとう……」

高台に吹き込む風はとても冷たかったけれど、それを撥ねつけるように、愛純は凜とした。

さっきまでの、 気弱な愛純はもういなかった。

「もう大丈夫だね」

「はい」

「何かあったらすぐに僕に話してよ。力になるから」

「はい」

頬を染めて、柔らかな表情で微笑んだ。

「家まで送るよ」

「すみません」

\* \* \* \* \*

晶が心の支えとなってくれてから、愛純は元気を取り戻し、また昔のように、c a f eの仕事を生懸命頑張るようになった。

クロッキーの会にもママに参加するようになって、会の皆とも一緒に楽しい時間を過ごした。

パーティーの会場で会った、晶の友人達も時々クロッキーの会に顔を出し、愛純の事をとて気にかけてくれた。

晶の周りには、人の噂に惑わされずに、まっすぐな目で見てくれる心優しい人達で溢れ、愛純は止まった時間を取り戻す様に、心から笑える幸せな時間が増えていった。

そんなある日．．．。

クロッキーの会の帰り道、c a f e銀のスプーンの前に、見知らぬ男性が立っていた。

「あの．．．。今日はお店は定休日ですが」

ショルダーバッグを肩から下げ、トレンチコートを着た、眼光鋭い

40歳前後ぐらいのその男性は、愛純の姿を見つけるとニコリとして、近付いてきた。

「私こう言うものなんですが、篠原 愛純さんですか？」

男から名刺を受け取り、背筋が凍った。

・ ・ ・ 週刊 特選ジャーナル 編集記者 小田切 隆志

「5年前の事件の事で色々お聞きしたくて．．．」

「何なんですか？」

「ちょっと、何処かゆっくり話せる所でお話を聞かせてくれませんか？」

・ ・ ・ 5年前の時の教訓で分かったが、こう言う記者は逃げ回ったり、邪険にすると、いい加減な事を書き並べ後々ひどい目に遭う。かといって、一生懸命話しても、適当に話しをわい曲させていい加減な記事を書く．．．。

どっちみち地獄だ．．．。

「近くの公園でもいいですか？」

「話してくれば、何処でも良いですよ」

その記者と、すぐ近くの公園の東屋に行き、ベンチに腰かけた。

「実は、『あの事件・事故は今』と言う特集で過去起きた衝撃的な事件・事故を取材してまして、愛純さんの事を、この間のパーティーでお見かけして、ひろみさんの自殺の事に興味を持ったので、話を聞きたいんですけど．．．」

「何で今ごろ．．．」

「加害者側としては、1日も早く忘れたい事件だと思うけど、被害者側の家族にしてみたら、1日たりとも忘れる事の出来ない悲しい事件だと思うんだけど．．．」

「私、加害者じゃありませんし、今でも忘れた事なんてありません」

「ほお．．．。ひろみさんの遺書に君の名前が書かれていたのに、謝罪の気持ちも、反省の気持ちも無いって事？」

「あの時だって何度も言いましたが、私は一度もひろみさんの事をいじめた事なんて無いんです。何で私の名前が書かれていたのか？今でも分かりません」

「そうそう．．．。後からひろみさんの日記が出てきたんだけど、この日記に書かれている『Aさん』ってあなたでしょう？」

当時、クラスメートの中で名前に“A”のつく子はあなたしかいないんだよね。

『今日、Aに帰り道に待ち伏せされて、暴行を受けた。』

『Aに呼び出されて、学校の裏で．．．。』

『Aが憎い』

『Aが許せない』

沢山日記にあなたの事が色々書かれてるけど．．．。これを見ても何も思わないんだ」

「かりにここに書かれているAが、私だとしても、一度もそんな事してませんから。」



私は、人を騙したり、いじめる事は大嫌いです。胸を張って言えます。私は一度もやってません」

「全く話しにならないね……。まあ、今日はこのぐらいで、またお話聞かせてよね」

そう言つて、小田切はすつくと立ち上がって一礼すると去つていった。

幸せになれるかなつて、希望が見え始めたのに、又過去に押し戻されそうになつて、愛純の心は破けそうだった。携帯を手にとると、無意識に、晶に電話を入れた。

「もしもし……」

晶の柔らかな優しい声が心に染みる……。

「晶さん？ 私……」

「どうしたの？ 今何処？」

「お店の前です」

「そこで待ってるんだよ。今すぐ行くから……」

それからすぐに晶が走つてやって来た。

よっぽど慌てて出てきた様で、この寒い冬に上衣も着ないで、顔を真っ赤にさせて、息を切らしながら走ってくるのが見えた。

「あずみちゃん」

「晶さん、こ面倒おかけしてごめんなさい……」

「どづしたの？」

「週刊誌の記者がやって来て・・・」

上衣も着ないで走って来てくれた晶さんが風邪をひいたら大変と、cafeの扉の鍵を開けて、中に上がってもらった。

一緒にカウンターテーブルに並んで腰かけて、今までの事を晶に話した。

「全く、頭から加害者だって扱いじゃないか！！」

「前にも同じような事があったから分かるんですが、きっとまた酷い加害者扱いされて、沢山の人から批判を受けて・・・。恐ろしくてたまりません」

「いい加減な記事を載せたら、知り合いの弁護士と相談して、名誉棄損で告訴してやるよ」

「伯母の店に迷惑がかかるかも知れませんが、晶さんにもきつと迷惑をかけてしまふと思います。ここを離れないと・・・」

「もし良かったら、裏磐梯五色沼近くに別荘を持ってるんだけど、しばらくそこに行かない？」

「え？」

「その方が良くと思うんだ。記事が載る前に早めに手を打っておかないと・・・」

「いいのですか？」

「全然構わないよ。五色沼に一緒に行こうよ」

「ありがとうございます」

そうして、晶と一緒に別荘に行く事にした。

この場所を離れて、数日後にあの記者の書いたとんでもない記事が『週刊 特選ジャーナル』に掲載された……。

『あの事件は今』

埼玉県立 聖山東高校 飛び降り自殺事件のいじめ犯人の今……。

パーティーで贅沢三昧、派手な交友関係……。

恋人は有名画家……。

「私は犯人じゃない！！ 無実だ！！」

全く反省もなく、今でも浮かばれない被害者 鈴木ひろみさんの無念……。

(第4話に続く)

## 第4話 夢

「すみません、ご面倒とご迷惑お掛けします」

愛純は、晶と一緒に裏磐梯五色沼の側にある晶の別荘にやって来た。

「そんな堅苦しい挨拶はいいから、遠慮しないで自分の家の様子のんびり過ごして、元気を出してよ」

「はい、ありがとうございます」

「そうそう．．．。後で、五色沼自然探勝路を歩きに行こうか？五色沼を 1時間ぐらいでぐるりと回って来れるんだ」

「はい」

「あ．．．。でも、前にギャラリーで瑠璃沼の絵を見て泣いていたからちよつと心配なんだけど、大丈夫かな？」

「実は湖に近寄るのちよつと不安なんです、チャレンジしてみたい気持ちなんです。」

いつまでも避けていたら、前に進めない気がして．．．」

「もし、気分が悪くなったり、不安になったら戻って来ようね。無理すぎないで、少しずつ前に進んでいこうね」

「ありがとうございます」

晶の大らかで温かく包み込む優しさに、側にいると恐ろしい事も、悲しいことも、嫌な事も、何もかも飛び越えられるような、そんな勇気が湧いて来るような気がした。

五色沼入り口の駐車場に車を置いて、晶と二人毘沙門沼に向った。

数歩歩き出したら、足がブルブル震えてきた。

湖に一步一步近付く事に気分が悪くなっていく。

「あずみちゃん、大丈夫？ 無理しないほうが良いよ」

「もうちょっと頑張ってみます。せつかく来たのに、ごめんなさい」

「そんな事気にしなくて良いから」

「今日は毘沙門沼の近くまででいいですか？」

「少しずつ、慌てないで、前に進んでいこう。今日は近づける所までで終りにしようね」

「はい」

晶は、しばらくギャラリーをスタッフに任せて、ずっと愛純の側に  
ついていてくれた。

毎日少しずつ、一步一步、距離を伸ばす様に、五色沼自然探勝路に  
通い続けた。

五色沼の美しい水を見てみると、引き込まれそうな、あの日の恐ろ  
しい光景が何度も頭の中をめぐったが、1か月かけてついに完全制  
覇する事が出来た。

「ついに全部回る事が出来たね」

「とても感激してます。実はまだ恐ろしい気持ちは抜けないのですが、晶さんと一緒だと勇気が出て頑張る事が出来ました」

「忘れる事なんて出来ないと思うし、これからも無理りはしないで良いと思うよ」

「はい。今日はとても嬉しいです」

「僕も嬉しいよ」

「ここの雄大な自然を見てみると、心が洗われる気持ちになります。自分はなんて小さな存在なんだろうつて思えて来て・・・」

「この場所に初めて訪れた時、あまりの美しさにすっかり心を奪われてしまったね。絶対にここに住もうつて思つて家を買つたんだ。結局悲しい事に、東京から離れられなくてここは別荘になつちやつたんだけどね。」

「少しでも時間があるとすぐここに来てしまつよ」

「本当に素晴らしいですよね。。。私も大好きになりました」

二人とも無言で、しばらく美しい景色を眺めてた。

「晶さん、こんなに長く私につきあわせてしまってすみませんでした。これ以上ご迷惑おかけ出来ないし、そろそろ東京に戻ろうかなつて思つてます」

「でも、まだ騒ぎが収まった訳じゃないし、もっとゆっくりしていんだよ」

「つつい優しい晶さんに甘えすぎてしまいました。こつ言つ騒ぎ  
つて、キリが無いと言つか、逃げ回っても埒があかないつて言つか  
。。。  
この1か月の間に私も強くなつて、勇氣も湧いて来ました。もう大  
丈夫です」

「だけど心配だな。今考えている事があるんだけど。。。」

「え？」

「一緒にフランスに行かない？ あずみちゃんはお菓子の勉強、僕  
は絵の勉強」

「素敵ですね。。。」

「お互い勉強しながら、ヨーロッパ各地を回つたり。。。」

「行きたいけど。。。」

「お金の事なら僕が出すから。もし負担に思つのなら、後で少しづ  
つ返してくれたらいいし」

「そこまで甘えても良いのか。。。」

「言ったでしょう？ 幸せになる為に、時には人に寄り掛かっても  
いいんだよ。幸せにならないと」

「ありがとうございます」

「是非行こうよ。向こうで一軒家借りて住もうよ。」

その．．．。変な意味じゃなくて、ルームメイトと言うか、友人同士が一緒に共同生活を送るって感じで．．．」

「晶さんがキチンとした方だって事は分ってますから大丈夫です。なんか希望が湧いて来ます。」

実はフランスで本格的にお菓子を学びたいって思っていました。それから、向こうのお菓子を食べ歩いたり．．．」

「わっ。本当？　じゃあ是非．．．」

それから二人は一端東京に戻って来た。

フランス行き実現の為に、パスポートをとったり、長期滞在の為にビザを申請したり、向こうで住む家を探したり．．．。色々夢実現の為に準備する事は山のようにうだ。

晶の方は以前フランスに留学経験もあるので、言葉の方も問題なく、現地の友人も居るし、向こうの生活の事も把握してて、その点は安心だった。

．．．と言っても、晶に頼ってばかりもいられない。

愛純はおばのcafeを手伝いながら、基本的な会話ぐらいは出来るようにと、短期のフランス語教室に通い始めた。

その間、あの記者がまとわりついたり、あの記者に踊らされて身勝手な正義感を振りかざし、愛純に嫌がらせをしてくる者も居たが、夢実現の目的に燃えていて、昔のように深く傷ついたりする事も無かった。

何よりも、強い見方になってくれる晶の存在は大きかった。

彼さえいれば、どんな事をされても耐えられる、頑張れる．．．。



晶はそんな前を向いて明るく頑張ってる、愛純の姿を見ると嬉しかった。

あの教会で見た、悲しげで、儚げで、壊れてしまいそうな愛純はもうここにはいない。

もっともっと 幸せになれ、毎日彼女が、ひまわりのように明るく笑っていられますように……。

心の底から願った。  
ずっと応援してるから……。

年も開け、いよいよフランス行も実現間近となった。

今日は、晶と一緒にフランス大使館に長期滞在のビザを取得しに行く為、愛純は晶のギャラリーに向っていた。

ギャラリーのショーウィンドー前に晶が立って待ってた。

晶は、こっちに向かって小走りの愛純に向かってニコニコしながら手を降っていた。

その時だった……。

後方から中年の男性が愛純に向かって駆け寄って、後ろから刃物で刺した。

「え？」

突然の事で、何も頭が回らない愛純……。  
ただ、背中に物凄い激痛が走る。

その男は……。

自殺した 鈴木ひろみの父親だった……。  
「ひろみをおんな目にあわせて……。のうのうとしゃがって……」

「

すぐ近くの交番から警官が駆け寄ってきて、晶も猛スピードで駆け寄る。

その男はもう一撃、刃物をふり降ろそうとしたが、警官と晶に阻止されて、あっけなく御用となった。

「あずみちゃん」

その場に倒れ込んだ愛純の服は、みるみる赤く染まり、道路に落ちた血がどンドン広がっていく……。

「晶さん、一緒にフランス……行きたかったです」

目から一粒の涙をこぼし、愛純はゆっくり目を閉じた。

（第5話に続く）

## 第5話 真実の扉

愛純は救命救急センターの手術室にいた。

傷は肺まで達していて、出血量も多く予断を許せない状況だった。

「あずみ．．．あずみは？」

30代後半ぐらいの、面倒見の良さそうな、それでいて、凜とした綺麗な女性が慌てた様子で、手術室の待合室に駆け込んできた。

「あずみちゃんの伯母さん!!」

晶がその女性に声をかける。

「月夜野さん．．．こんな事になるなんて．．．。どうしていいの  
か．．．。」

「僕がついていながら、本当にすみませんでした」

「月夜野さんのせいじゃありませんから、ご自分を責めないでください  
さいね。」

愛純は月夜野さんのお陰で、どれだけ救われたか．．．。  
感謝しても仕切れないぐらいなんですよ。

愛純が、月夜野さんの事を話す時．．．それはもうとても幸せな顔  
をして．．．。

そんな愛純を見ると、私もとても嬉しくて．．．。」

どれだけ時間が過ぎただろうか．．．。

何とか一命はとり止め、愛純はICU（集中治療室）に移った。

処置を行った医者が出て来て、状況説明をする。

「先生……」

「傷は肺まで達してて、太い血管を損傷して多量の出血があり、危険な状況でした。」

手術は成功しましたが、依然危険な状態で、予断は許せません」

「どうかよろしくお願いします。なんとかあずみを……」

ほんのわずかの短い時間だが、身内だけは愛純に面会できるとの事で、伯母がICUに入って行った。

晶は、ICU入り口近くの長イスに座り、必死に愛純の回復を祈った。

暫くしたら、伯母が疲れ切った顔で戻って来た。

「伯母さん」

「月夜野さん……。愛純は意識不明の状態で、全く動かないし、真っ青な顔をして……。愛純に何かあったらと思うと……」

「悪い事を考えてはダメですよ！！ あずみちゃんが早く元気になるように、その事だけ考えましょう……」

晶が愛純の伯母と話している時だった……。

40代の男性が、重々しい表情でゆっくりと近付いてきた。手には花束と、お見舞い用のフルーツカゴを持っている。

「あの……篠原 愛純さんは こちらに？」

「どなたですか？」  
伯母が、怪訝そうな顔で見る。

「特選ジャーナルの編集記者の小田切です」

晶がその男性の胸ぐらを掴んで、今まで見せた事の無いような怒りの形相になる。

「あんなくだらない記事を書せたお陰で、こんな事になったんだぞ！！　よくもぬけぬけと此処まで来れたな！！」

「はつきり言いますが、愛純は人をいじめるようなそんな子じゃありません。　今まであなた方のようないい加減な記者の書く記事でどれだけ苦しめられてきたか分かりますか？

あなた方の書いた記事によって、世間からどれだけ冷たい目を向けられてきたか・・・。

愛純は学校を追われ・・・。

愛純の父親は職を失い、心を病んで、家族を巻き込んで発作的に湖に車で飛び込んで、愛純だけ生き残って・・・。  
記事に踊らされた、ネジ曲った正義感を持った者が、愛純の家に火を放ち、全焼して、家も失って・・・。

愛純には、家族もいなければ、家族写真も家ごと燃やされて残って無いんですよ。

そして今度は命までも・・・。

これで満足ですか？　もう帰って下さい！！　二度と現れないで！！

晶が反響乱の伯母を氣遣って肩に手をおいた。それから記者に向って睨みつけて口を開いた。

「パーティーは僕が無理矢理誘って、彼女は初めていったんだ。

僕達は恋人でも無いし、僕が一方的に思ってるだけで、彼女は人を愛する事も恐がってる……。

それでも、一生懸命今まで生きて来たんだよ。

高校卒業の資格を取って、製菓学校に行つて、製菓衛生士の資格と紅茶コーディネーターとバリスタの資格を取って……。

何で彼女がお菓子の道に進んだか？

人が喜ぶ顔を見るのが嬉しいからって言ってたよ。

世間から冷たい目で見られても、自分の作ったお菓子を食べて、喜んで幸せになつてくれるって。

それを見る事がとても嬉しいからだって。

とびきり美味しいお菓子を作つて、美味しい飲み物を出して、人を幸せな気持ちにさせてあげたいって言ってたよ。

その為に、これから一緒にフランスに行つて勉強を続けるはずだったのに……。

もう二度と現れないでくれ!!

あんたの書いた記事は真実じゃない!! 虚偽だよ!!

悪いと思つてるんだったら、この事件の真の真実を見つけて、愛純ちゃんの前に跪いて許しを請うんだな」

小田切はよろめきながら、去つて行つた……。

小田切は、自室の書斎の机に向って、頭を抱え込んでいた。小田切自身、妹がクラスメートのいじめによって、登校拒否となり、今でも実家の自室に引きこもっている。そんな事もあり、この事件をとりあげて、いじめる側の人間を絶対に許せないと復讐心を抱き、あの記事を書いた。記者の立場から言うと、公平さを失って偏った許されないものに間違いなかった。

篠原愛純が、今までどんな生き方をしてきたのか？

そんな事お構いなしで、復讐心を心の奥底に持ちながら、夢中になつて書いた記事だ。

その彼女がこの5年間、そんな人生を送つて来たとは．．．。そして、被害者の親である 鈴木ひろみの父親を、今度は加害者にさせてしまった。

「なんて事だ．．．」

引き出しから、鈴木ひろみの親から預かった、日記を出した。

ゆっくりと日記を広げて、ふとおかしな事に気がついた．．．。

日記は厚手の表紙のついた、良い物だった．．．。

その表紙の裏面は薄紙が張つてあるが、その薄紙が何となく浮いてて、その下に何か挟まっている感じがした。

薄紙を慎重にゆっくり剥がすと、四角に折りたたんだ小さな紙が出てきた。

その小さな紙をゆっくり広げる．．．。

小田切の目がカツと見開かれて、衝撃が走った。

その紙には、自分をいじめた5人のクラスメートの名前と、ある事が書かれていた……。

この紙が書かれた日付は、鈴木ひろみが亡くなる前日だった。

\* \* \* \* \*

今日、xxから 自殺ゴッコを強要されて、無理矢理遺書を書かされた。

その遺書に、いじめの首謀者として、しいちゃんの名前を書かされた。

しいちゃんはいつも私に優しくしてくれて、良い子なのに、すごく悔しい……。

その紙を取り上げられた……。

xxが、返して欲しかったら明日の早朝、学校の屋上に来いって言うてきた。

何をされるんだろう……。

私に何かあった時の為に、ここに証拠を残しておく。

XXXX年X月X日

私をいじめた奴

リーダー      XXXX      XXXX

仲間4人の名前……。

\* \* \* \* \*



「しいちゃんって一体誰なんだ？」

日記には、Aとその仲間にいじめられた心の苦しみと怒りと悲しみがあふれていた。

それから、時々クラスの中に優しく親切にしてくれるSちゃんと言う子がいて、その事が心の救いになっているようで、その嬉しい気持ちも書かれていた。

『悪いと思ってるんだったら、この事件の真の真実を見つけて、愛純の前に跪いて許しを請うんだな』

月夜野の言葉が頭の中をグルグル駆け巡る・・・。

「俺はとんでもない事をしてしまったみたいだ・・・」  
この償いは、真実を突き詰めて、明らかにするしかない。

\* \* \* \* \*

小田切は当時のクラスメート一人一人に当る事にした。  
まずは事件と無関係そうな子から・・・。

日記に書かされたいた、親切な優しい子『Sちゃん』とあの紙に書かれていた『しいちゃん』は同一人物のようだった。

その人物は、当時のクラスメートだった子から聞いてすぐに判明した。

篠原 愛純だった・・・。

当時愛純は、名字の『篠原』からとって、『しいちゃん』と呼ばれていたそうだ。

「と言う事は、あの残された遺書は無理矢理強要されて書いた物だったのか・・・」

そしてあの小さな紙に書かれていた、いじめの首謀者は

朝倉 佐和子だった・・・。

日記に良く出てきた、いじめの首謀者Aとは『朝倉』のAだった・・・。

その当時、親切な『Sちゃん』は、『佐和子』の『S』だと思われ  
て、朝倉佐和子は 鈴木ひろみの両親からも感謝されていた。  
雑誌などでも素晴らしい人物のように書かれていた。

加害者である『朝倉佐和子』が皆からもてはやされて、鈴木ひろみ  
の恩人にも値する『篠原愛純』がこの数年間言い尽くせないほどの  
酷い目に合い続けてきた。

そしてそのとどめをさしてしまったのは、小田切自身だ・・・。

机の上で頭を抱えて突っ伏してしまった。

「俺は、なんて事をしてしまったんだ!!」

残るのは、あの事件の日の真実だ・・・。

あの小さな紙では、自殺するような事は書かれて無い、逆に身の危  
険を感じてるような、脅えているような様子だった。

まずは、いじめの首謀者の仲間だった4人に一人ずつ当るしかない  
・・・。

(第6話に続く)

## 第6話 パンドラの小箱

いじめリーダー格『朝倉 佐和子』の仲間4人に、一人ずつ当たって見た。

鈴木ひろみの父親の起こした事件の事がかなり衝撃だったようで、最初は居留守を使ったり、逃げ回ってばかりで、なかなか接触する事が出来なかったが、一人ずつ鈴木ひろみの残した事故の前日のあのメモのコピーと小田切の名刺を封書で送りつけたら、アツサリと全員向こうから連絡をとってきた。

4人一緒ならと言う事で、小田切の知り合いのイタリアン・ダイニングカフェの個室で話しを聞く事になった。

やはりあの事件の事で、お互いに気まづくなってしまった、あの後は友達付き合いも無くなり、お互いに避け合ってきたようで、連絡もとりあわなかったようだ。

4人の名前は、広岡 瑞穂、望月 香織、田中 麻里、高幡 淑子  
。。。

「どうぞはいつて。。。」

小田切が4人を個室のテーブルにつかせた。

「で。。。。早速話しを聞きたいんだけど、誤魔化したり、嘘をついたりしたら、あのメモ公表するからね」

冷やかな目をして、小田切が4人を牽制した。

「それだけは。。。。私達はあの日は、なにもしてません。本当です」

瑞穂が泣きそうな顔で訴える。

「でも、居たんでしょ？ あそこに．．．」  
知っているようなそぶりを見せて、罨を仕掛ける。

「知っている事全部話しますから許してください」  
香織が泣きながら、口を開いた。

「皆だって、ずっと苦しんできたんでしょ。もう話そうよ」

他の3人が、皆一斉にうなずいた。

自分を落ち着かせるように、呼吸を調べてから、香織が口を開いた。  
「鈴木ひろみちゃんと佐和子は、元々同じ中学で、その頃はとても仲良しでいつも一緒に行動していたみたいです。」

仲良し5人グループの仲間同士だったようで．．．。

そのグループメンバーから、聖山東高校に入ったのがひろみちゃんと佐和子で．．．。

あとの3人は学力が足りなくて同じ高校に行けなかったみたいです。  
そして、高校に入った途端、佐和子はひろみちゃんを避けるようになって、そればかりか憎しみの様な物を持っていて、執拗にいじめられるようになって．．．。

私達も、佐和子のキツイ気性に圧倒されて、一緒になってひろみちゃんをいじめてしまいました。

今では物凄く後悔して反省してます。

あの時は、佐和子の言う通りにしなかったら、今度は自分がいじめられるって恐怖があつて、必死でした」

「で・・・あの事件の日の前日の事から話してくれるかな？」

「今度は私が話すよ」

麻里が香織に言ってから、決心した様に、口を開いた。

「今、看護師の勉強をしていて、命の重さとか大切さとか深く理解するようになって、人の心や痛みも理解出来るようになって、あの時の事をとても後悔して、反省してます。

ひろみちゃんの事は、1日も忘れた事がありません。

しいちゃん（愛純）の事も、ずっと気にかかってました。

本当の事を話さなくてはと思いながら、ずっと勇気が出なくて・・・  
本当に自分が情けないです。

あの日の前日、佐和子が『自殺ゴッゴ』をしようって言い出して、ひろみちゃんに遺書を書かせたんです。

あれは本当にやりすぎだと思って、本当は、その場に居ることも嫌でした。

だけど、やめさせる勇気が出なくて・・・。

佐和子は、当時 しいちゃんが付き合ってた居た、古橋先輩の事が好きだったから、しいちゃんの事嫉んでました。

だから、その遺書にしいちゃんの名前を書かせたんだと思います。

その遺書を取り上げて、返して欲しかったら明日の朝6時に学校の屋上に来るように言ってました。

私は寝坊して、あの日は遅れてしまって・・・。  
行った時には大騒ぎになっている時でした。何が起きたのかは全く分かりません」

「私もそんな朝早くは行けなくて、寝坊してしまって・・・。あの

日の事は知りません」  
香織が青ざめた顔で言った。

「実は私も．．．。学校には風邪で休んだ事になってますが、恐ろしくなつて学校をずる休みしてしまつて、あの場所に行つてません」  
瑞穂がおどおどしながら口を開いた。

「あの．．．。私、佐和子が恐くて行きました」  
淑子がワツと泣きながら話し始めた。

「佐和子はあの遺書を、ひろみさんのバッグの中にこっそり入れて、別の真つ白な紙を飛行機に折つて、屋上でひろみさんを待ちかまえてました。

ひろみさんが来たら、その紙飛行機をここから飛ばしてやるつて．．．。投げ飛ばして．．．。

それをひろみさんが追いかけて．．．。フェンスを乗り越えて、落ちたんです。

慌てて見に行きましたが、ひろみさんは下に落ちてしまつて．．．。

紙飛行機は木の枝にひっかかつて、誰も気づきませんでした。

私はただその場に居ただけで、なにもしてないんです。

今までずっと苦しんできました。

辛くて辛くて何も手につかなくて．．．。今でも家に籠つてます」

「なんで、佐和子さんはそんなにひろみさんを憎んでいたのかな？」

小田切が重い表情で皆を見た。

彼女達は、佐和子とは違う中学校で、中学校のころの事は佐和子もあまり話したがらなかったそうで、何も分からなかった。

朝倉佐和子の家は父親が会社経営をしており裕福で、親が買つてくれたセキュリティーの完備された、高級マンションに住んでいた。

小田切は朝倉佐和子にも鈴木ひろみの残したメモのコピーと自分の名刺を封書で送った。

佐和子からすぐに連絡が来た。

かなり動揺して、慌てた様子だ。

佐和子のマンションに呼び出されたが、身の危険も感じたので、例のイタリアン・ダイニングカフェの個室に呼び出した。

「お願い、この事は黙って欲しいの、お金ならいくらでもあげるから．．．」

「私は真実のみが知りたいんで．．．。あなたねえ、愛純さんに全て罪をなすりつけてのうのうと今まで生きて来て、何も感じなかったの？」

「私だっつてずっと苦しんできたわ」

「こうなったら、全て話してくれるかな？」

「話すから、この事は世間に公表しないで．．．」

「この期に及んでまだ逃げ隠れするつもりなの？」

「ひろみは自分から落ちたのよ。私は悪くないわ．．．」

「だったら話してよ。何でそんなに嫌っていたのか？」

佐和子の話しでは、中学校時代の周りからは仲良し5人グループと見られていた、そのグループのリーダー格、小菅 沙耶子から、度

々お金をせびられていじめを受けていたそうだ。

小菅 沙耶子は、表向きは真面目な子で通して居たが、実は裏番を張っていて、裏ではかなり悪い事をしていたそうだ。

その 小菅 沙耶子と 鈴木ひろみは幼なじみだったそうで、親友と呼べるぐらい仲が良かったそうだ。

グループから離れたたくても離れられずに、沙耶子からいじめられ続けてきた事は、元々プライドの高い佐和子にとって、堪え難い苦痛の日々で、かなり辛い中学校生活を送り続け、彼女から逃れたいが為に、猛勉強をして、成績がそれ程良くなかった、沙耶子と同じ高校に行かない様に聖山東高校に入ったそうだ。

だが、やっとかかわりが消えたと思った所、同じグループだった鈴木ひろみが同じ高校に入って、更に同じクラスになって、佐和子の我慢も限界に達してしまっていたとの事だ。

同じクラスになって、鈴木ひろみは朝倉佐和子を見付けたら、すぐに駆け寄ってきて、こう言ったそうだ。

「同じクラスになって良かった。また宜しくね。また今度、中学校時代の仲良かった皆にも会いたいね」

何気ない一言だったが、佐和子にして見ればゾクツとする言葉だったらしい……。

鈴木ひろみが近寄らないように、徹底的に嫌がらせをして追い払う気持ちだったらしい。

ひろみの方は良く分からず、佐和子とまた仲良くしたいと佐和子の周りをいつも付いて回ったらしい……。



「ひろみもやつと私が嫌って居る事に気がついたようで、あの事を最後にしようと思ってたのよ。」

まさか、あんな紙つ切れを取ろうと思って屋上から落下するなんて思いも寄らなかつた．．．。

疑われた愛純が可愛そうって思ったけれど、周りの冷たい仕打ちが恐ろしかった．．．。

私の事がバレたら、どんなひどい目に合うかと思つたら、何も言えなくて．．．。

今日までずっとビクビク生きて来た．．．」

泣き崩れる佐和子．．．。

「あのパーティーだって、愛純に会って恐ろしかった．．．。恐いから、あんな態度をとつたのよ。」

また恐ろしい過去に引き戻される気がして．．．。雅人を愛純に奪われないか？その事も恐ろしかった．．．。」

泣きながら、佐和子は小田切にすがりついた。

「お願い、見逃して．．．。この事を公表しないで！！」

「あなたは身代わりに罪を被ってきた愛純さんの事はどうでも良いのか？」

「今日まで必死で逃げてきたのよ．．．。今ごろになって．．．。そんなの嫌よ！！」

「何て子なんだ．．．。」

「今日まで逃げてきたのに．．．。こんな事で自分の人生を台無し

になんてさせるものですか!」  
そう言つと突然佐和子は隠し持っていた包丁で小田切に切り掛か  
た。

「うわあ」

とっさに除けて、肩を少し切られたぐらいで済んだ。

小田切はさつと個室を抜け出し、部屋の鍵をかけて佐和子を閉じこ  
めた。

警察に引き渡し、佐和子の事はその日の夜の各局のニュースに流れ  
た。

小田切は佐和子が素直に非を認めたら、愛純は無実だった事を公に  
しても、佐和子やその仲間達が誰だったのかは公表しないようにす  
るつもりだった。。。

今まで避難の嵐で辛い人生を送り続けてきた愛純は一転、世間から  
同情される人物となった。。。

\* \* \* \* \*

愛純は、2週間ICU（集中治療室）にいて、やっと一般病棟の個  
室に移った所だった。

世間が大騒ぎになっている事はまだ良く知らない。

「ICUは身内しか会う事が出来ないから、僕は入れなくて淋しか  
つたよ、あずみちゃんにとても会いたかった。。。」  
晶は嬉しくて、ウキウキしている。。。

「ご心配おかけして、すみません」

まだ起き上がるのは辛そうだが、血色も良く、大分回復した愛純。

「そんな謝らないでよ。本当に良かった……。フランス行は、怪我が治って落ち着いたら行こうね」

「はい！ その日を楽しみに、早く元気になれるように頑張ります！！」

あの……。ひろみちゃんのお父様はどうなりましたか？」

「殺人未遂になるから、多分刑期10年前後ぐらいになると思う。 . . .」

「そんな。 . . .」

「辛い目にあつたのに、心配するなんて……。初犯だし、きっともう少し早く早く出てこれると思う。

お父さん、あずみちゃんに申し訳ない事したって、泣いて謝っていたそうだよ」

「え？」

「あれから、あずみちゃんの無実が分かって、もう誰もあずみちゃんのこと悪く思ったり、批判する人は居ないから安心して……。もう大丈夫！！」

「なんで。 . . .?」

「まだ一般病棟に移ったばかりだし、もう少し元気になったら教えるよ」

それから暫くして、あれから何が起こったのか？愛純は全てを知った。

小田切が謝罪しに来て、愛純は何も責めずに許してあげた。

「目まぐるしく色々な事があつたけれど、大丈夫？」  
心配して愛純を気遣う晶。

「大丈夫です。真実が明らかになったけれど、淋しい気持ちです。ひろみちゃんも可愛そう……。  
いじめた彼女達も今までずっと苦しんできたと思うし、だれ一人幸せじゃなかったように思えます」

あれから、鈴木ひろみの母親が謝罪しきにて、留置所にいる父親からのお詫びの手紙ももらった。

鈴木ひろみと中学時代に佐和子にお金をせびっていじめていた、小菅 沙耶子は、幼なじみだったが、佐和子の思っている様な親友ではなく、鈴木ひろみの父親も中小ながら工場を経営してて裕福だったので、やはり沙耶子からお金をせびられていじめられていたそうだった……。

そして佐和子が恐れていた、小菅沙耶子は、高校入学前に男友達の運転するバイクの後ろに乗って事故に遭い、亡くなっていた。

鈴木ひろみは、5人グループの中では1番佐和子を慕っていたのだった……。

だから、同じクラスになれてとても喜んでいた。

「この世からいじめなんて無かったらいいのに……。いじめても、いじめられても、心が貧しく、不幸でしかないですよね」

愛純がため息交じりに晶に言った。

佐和子といっしょにあの屋上に行き、ひろみの転落を目撃してしまった淑子は、未だに引きこもって心を病んでしまっている。

その後、佐和子の事が公になってからすぐに4名の名前は、ネットの裏サイトで顔写真入りで公表されてしまった。

看護師を目指していた田中 麻里は、学校をやめる事になり夢を諦める事になった。

他の子達も皆、会社をやめたり、世間から冷たい目で見られる人生を送ることになってしまった。

「そうそう・・・」

晶が愛純に1冊のアルバムを渡した。

「これは？」

「あずみちゃん、家が火事になった時アルバムも燃えてしまったって聞いてね、幼い頃の写真は、伯母さんがほんの数枚持っててね、あとは、あずみちゃんの小、中、高校と、同級生が誰か持ってないかずっと聞き回って、何点か見つけて・・・。後は思い出話とか聞き回って、イメージを膨らませて僕が絵に描いて見た。あずみちゃんのアルバムを作ってみたんだ」

中をパラパラ見て、大喜びの愛純。

「嬉しいです。悲しい事に、写真が無いと家族の顔もどうだったかなって漠然としか思い出せなくて・・・。

会えないだけじゃなくて、顔も思い出せないのが淋しくて・・・。だから凄く嬉しいです。

あ．．．。運動会を見に来た家族写真の絵もある」

後ろの方に、角が少し燃えてしまっていたが、家族の写真が貼ってあった。

「これはね、家の燃え跡から伯母さんが見つけたそうだよ。ダイニングの出窓にフォトスタンドに入れて飾られていた家族写真だったよ。ようだよ」

「嬉しい．．．。1枚も無いと思っていたから．．．。本当に嬉しい．．．。お母さんだ、そうそう．．．。こんな顔だった．．．。弟のヒロだ。お父さんも．．．。凄く嬉しいです」

「それから最後を見て！」

「あらこれは？」

愛純が顔を真っ赤にする。

「これは僕の願望．．．。勝手にアルバムに入れてゴメンね。嫌だったら捨てて構わないから。」

そこには、愛純と晶の結婚式の写真の絵が入っていた。

「うっん。嬉しいです」

「本当？」

「はい」

「凄く感激してるよ。嬉しいな」

\* \* \* \* \*

それから半年後、愛純と晶はフランスへと旅立って行った。

愛純は現地でお菓子の勉強をしながら、お菓子を食べ歩き、近辺の諸国を晶と一緒に旅行して回って。

晶は、あちこち気に入った風景があると絵を描き、膨大な作品を描き貯めた。

二人はユーレイルパスを使って、列車で国境を越えたり、ヨーロッパバスに乗ってバスで旅したり．．．。スイスで登山列車に乗ったり．．．。

あつという間の２年間だった．．．。  
日本に戻って来る時には、あずみの薬指には晶からもらった婚約指輪が光り輝いていた。

cafe 銀のスプーンは、すぐ近くに新しく建てた立派なビルの1階部分に移動し、その2階3階が、ギャラリー月夜の夢に．．．。  
その上は、伯母の住居スペースと、その上が晶と愛純が結婚後に住む住居スペースに．．．。

「私の人生ってパンドラの箱かなんて最近思います」

「え？」

「パンドラの箱からは、色々な災いが飛び出して世界に広がったけど、最後に希望が飛び出したそうです。私のこれからは、希望と喜びに満ちあふれていると思います。」

今まで地の底のような経験もしましたが、晶さんや伯母や、私の事を思っ下さる方達のお陰で乗り越えられました。底の底を味わったから、どんな事も耐えられますし、頑張っていきます。

何より、晶さんがいつも側にいてくれますし」

「この先何があっても、一緒に支え合って、助け合っ生きていこうね。

僕はいつもあずみちゃんの味方だから・・・」

「はい・・・」

「イチヨウが綺麗だね・・・」

「初めて晶さんにあっ日もイチヨウが綺麗でした・・・」

「これからの僕達みたいに銀色に光り輝いて見えるよ」

「はい・・・」

.....END.....



## 第6話 パンドラの小箱（後書き）

主人公の立ち向かう困難の内容が、ちょっと重々しいかなとも思いましたが・・・最後は心温まる話しでまとめられたかなと思います  
が・・・以下がでしたでしょうか？

最後まで読んでくださりありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4090t/>

---

月夜の夢

2011年6月2日00時16分発行